

「思いやる心」の育成に向けた

小学校体育科における主体的・対話的で深い学びの充実

指導主事 黒木 幸博

研究協力員 八代市立松高小学校 教諭 渡瀬 洋

研究協力員 苓北町立志岐小学校 教諭 石井 勇気

1 研究主題について

本研究で育成を目指す「これからの社会に求められる資質・能力」は、学校や地域の実態等を踏まえ、「思いやる心」と設定した。その理由は次のとおりである。

(1) 検証1（八代市立松高小学校）について

八代市立松高小学校の校訓の一つに「仲よく」があり、目指す児童像に「仲よく協力する」ことが示されており、資質・能力「思いやる心」を育成することで、これらの校訓や目指す児童像の具現化につながると考えた。

(2) 検証2（苓北町立志岐小学校）について

苓北町立志岐小学校の教育目標や目指す児童像に「豊かな心」が示されており、資質・能力「思いやる心」の育成は、教育目標や目指す児童像と合致するものであると考えた。

2 研究の視点

「思いやる心」の育成に向けた主体的・対話的な学びを充実するために、3つの視点から取組を工夫し、これらの取組を通して、深い学びが行われるようにする。

(1) 視点1（学びを引き出す）について

「チームの特徴に合った作戦づくり」という学習課題の設定や、活動に見通しを持つことができるオリエンテーションを単元の始めや授業の始めに実施することにより、児童が主体的に学習に取り組むことができるようにする。

練習やゲームなどの活動が学習課題の解決に向かうためには、グループ内の対話的な活動が欠かせないため、その活動の場や時間を設定する。

学習課題の内容が、仲間を理解し、仲間と協力しながら解決（達成）していくものであるため、児童らが資質・能力「思いやる心」を働かせたり高めたりしながら活動していく状況がつけられると考える。

(2) 視点2（学びを振り返る）について

設定したり選択したりした活動（ルールや作戦）の理由について記入するワークシートを使用し、グループ（チーム）内の考えを共有化したり、考えの変容が見取れるように可視化したりして、グループ（チーム）内でお互いに理解し合うことができるようにする。

また、振り返りの場面において、学習目標や学習課題に対する振り返りだけでなく、主体的・対話的に取り組んだ学習活動に対する振り返りも行うことで、資質・能力「思いやる心」を働かせたり高めたりすることを意識した学習活動につなげる。

(3) 視点3（学びを支える）について

体力・運動能力や運動の技能、資質・能力「思いやる心」において多様なメンバーでグループを編成し、児童同士のダイバーシティ（多様性）の下で主体的・対話的な活動が進められるようにする。お互いに協力し合い、認め合いながら学び合うことが求められ、「思いやる心」を働かせたり高めたりしなければならない環境がつけられると考える。

3 研究の実際

検証1 小学校第6学年

単元名 「バスケットボール」

(1) 本単元の授業設計

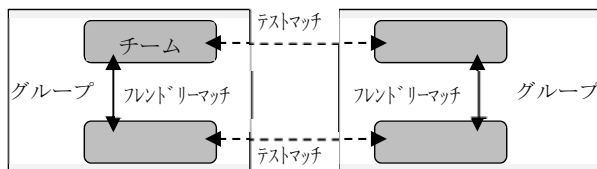
① 単元計画（7時間）について

	1	2	3	4	5	6	7			
5	準備・健康観察・準備運動									
10	オリエンテーション	スキルアップタイム	スキルアップタイム		まとめのゲーム マッタカップ					
15			オリエンテーション	フレンドリーマッチ						
20		フレンドリーマッチ	テストマッチ							
25										
30	試しの運動									
35										
40										
45	振り返り・まとめ・整理運動・片付け									

体育科学学習において、基礎的・基本的な技能を習得することは、「作戦づくり」の学習を進めるうえで必要不可欠である。そのため、単元を通して、その習得のための活動「スキルアップタイム」の時間と

場を設定する。

「作戦づくり」の学習は、「フレンドリーマッチ」と「テストマッチ」の活動を通して進める。フレンドリーマッチは、作戦を実行できるようになるための練習を行うことを目的とし、同じグループ内のチームと対戦する方法で行う。テストマッチは、考えた作戦が有効かどうかを試すことを目的とし、違うグループのチームと対戦する方法で行う（図1参照）。



【図1】フレンドリーマッチとテストマッチの対戦イメージ

② ゲームのルール等について

○ハーフコートゲーム（フレンドリーマッチやテストマッチで行うゲーム）

攻撃側優位のルールにすることで、考えた作戦が実行しやすい状況をつくる。

<主なルール>

- ・攻守分離
- ・人数 攻撃3人 vs 守備2人
- ・時間 3分（攻撃90秒、守備90秒）
- ・スタート ゴール下からのスローオフ（得点後も同じ）

○オールコートゲーム（マッタカップのゲームで、テストマッチでも行うゲーム）

自陣コート内（守備側）の人数を制限することで、攻撃側優位の展開でゲームを行うことができ、ハーフコートゲームで練習したり試したりした作戦を実行しやすい状況をつくる。

<主なルール>

- ・攻守混合
- ・人数 3人 vs 3人（自陣コート内の守備は2人）
- ・時間 3分（90秒 - 90秒）
- ・スタート ハーフコートゲームと同じ

(2) 指導の実際

第6時に行われた授業から、主体的・対話的な学びが展開された様子を紹介する。

[学習目標]

チームの特徴に合った作戦（自分の役割）を立てることができる。【思考・判断】

[学習課題]

チーム：チームの作戦を決めることができる。

個人：作戦が成功するための自分の役割を理解してゲームの中で実行することができる。

作戦タイム

チームで話し合う前に、全体で「ボールを受けることのできる場所に動く」ポイントを共有する。



チームに分かれ、チーム内の「ボールを受けることのできる場所に動く」ための約束ごとやチームの作戦（ポジションや一人一人の役割）を確認し合う。

テストマッチ

ハーフコートゲームで、「ボールを受けることのできる場所に動く」ことを意識してプレイしている。



オールコートゲームで、チームの作戦（ポジションや一人一人の役割）を意識してゲームをしている。



振り返りと次時の課題設定

チームの作戦について振り返り、それを基に次時の課題を設定している。



はじめに共有した「ボールを受けることのできる場所に動く」ことができたかについて、全体で振り返っている。

(3) 検証結果と考察

主体的・対話的な学びがどのように展開されたのか、一つのグループを紹介する。このグループは、交流学級の児童（A子）とバスケットボール部員の児童（B子）、そしてバスケットボールの経験はないが体力・運動能力の高い児童（C男）の3名である。

このグループの学びの過程を、チームリーダーの

B子が記したワークシートの内容から追跡した。

[B子がチームのために心がけたこと・頑張ったこと]	
第1時	声を出してパスをすること
第2時	アドバイスをすること
第3時	全員がシュートを打てるように声をかけたこと
第4時	〃
第5時	シュートを打つこと
第6時	仲間がパスを受け取りやすいところに動けるように声をかけること
第7時	三角形の位置取り
[B子が授業の中で嬉しかったこと]	
第1時	声かけしてもらった
第2時	「ナイスシュート」と言われた
第3時	失敗したときに「ドンマイ」と声かけされた
第4時	これまでシュートを打てなかったA子がシュートを打つことができた
第5時	他のチームの人からも声かけしてもらった
第6時	チーム全員がシュートを打つことができた
第7時	たくさんシュートを打てた
[B子の単元終了後の感想]	
チームの特徴に合わせた三角形の動きやパス回しが、最初はできなかったけど、だんだんできるようになりました。チームの協力ができてきたからだと思います。	
これからも、何をするにしても、協力する場面があれば、今回のことを生かしたいと思います。	

B子が、チームの作戦のためやチームリーダーとして、自分の役割を果たそうと努力していること、そして、その努力したことが認められたり報われたりしたことを嬉しく感じていることを読み取ることができる。また、単元終了後の感想に「できなかったことができるようになった」とあるように、自分を含めた仲間そしてチームの成長を実感しており、主体的・対話的な学びが充実していたことが分かる。

C男も、最後の時間の授業の感想で「パスが繋がったことや全員がシュートを打って勝てたことが嬉しかった」と述べていた。B子と思い（目指すもの）を共有しながら学習を進めてきたことを感じる内容であった。

表1は、高橋らが作成した「形成的評価票¹⁾」を活用して実施した形成的授業評価のグループの結果（総合平均点：3点満点）である。

数値の変動から分かるように、学習は試行錯誤を繰り返し、良かったり良くなかったりしながら進められ、最後に一番良い結果で終わることができた。このことから、主体的・対話的な学びは、試行錯誤

【表1】 抽出グループの形成的授業評価結果

第1時	第2時	第3時	第4時	第5時	第6時	第7時
2.56	2.83	2.56	2.17	2.83	2.78	3.00

※A子は記述することが困難なために、授業評価を行っていないので、結果は残り2名の平均値である。

を繰り返していくことで充実していくのではないかと考える。

このように、児童同士のダイバーシティ（多様性）の下で、主体的・対話的な学びが充実できたのは、児童が、お互いを理解したり、お互いに協力したりするために、「思いやる心」を働かせたり高めたりした結果と考える。また、このような経験を「次に生かしたい」と述べているように、B子は「思いやる心」の大切さを実感している。他の2名の気持ちをこの紙面に示すことはできないが、A子の表情や行動、C男のワークシートの記述内容から、「思いやる心」が膨らんでいるのが分かる。したがって、児童の「思いやる心」は育まれたといえるのではないかと考える。

他のグループにおいても、主体的・対話的な学びの内容や質はグループによって異なるが、その学びが充実していたことが、後述している単元の形成的授業評価結果（図1参照）から読み取ることができ、それぞれのグループで、児童が「思いやる心」を働かせたり高めたりしながら学習を進めることができたと考えられ、そのことによって「思いやる心」が育まれたといえるのではないかと考える。

以上のことから、検証1の学習は、主体的・対話的で深い学びが行われたと考える。

検証2 小学校第6学年

単元名 「ソフトバレーボール」

(1) 本単元の授業設計

① 単元計画（8時間）について

	1	2	3	4	5	6	7	8
5	準備・健康観察・準備運動							
10	オリエン テーション	スキル アップ タイム	スキルアップタイム			スキルタイムアップ	まとめの ゲーム	
15						フレンドリー マッチ		
20			フレンドリーマッチ					
25						テストマッチ		
30								
35								
40								
45								
				振り返り・まとめ・整理運動・片付け				

スキルアップタイムの設定の理由、フレンドリーマッチ、テストマッチの方法、目的は検証1と同じである。

② ゲームのルール等について

<共通ルール>

- ・コート バドミントン（ダブルス）用コート
- ・人数 4人（コート3人＋サーバー）
（ローテーション）
- ・タッチ 3回（必ず）
- ・時間 4分（フレンドリーマッチは2分）

<選択ルール>次の3つの中から1つを選ぶ。

- ・ファーストタッチをキャッチできる。
- ・セカンドタッチをキャッチできる。
- ・タッチできる人を1人つくることができる。
(ただし、3回目のタッチはキャッチできない。)

すべてのチームに共通する「共通ルール」とチームの特徴に合わせて選ぶ「選択ルール」を設定する。

(2) 指導の実際

第7時に行われた授業から、主体的・対話的な学びが展開された様子を紹介する。

〔学習目標〕

チームの特徴に合った作戦（自分の役割）を立てることができる。【思考・判断】

〔学習課題〕

チーム：選択したルールを理解して、ゲームの中で実行することができる。

個人：作戦が成功するための自分の役割を理解して、ゲームの中で実行することができる。

ミーティング



選択したルールと一人一人の役割を確認し合う。



フレンドリーマッチ

同じグループで、ゲームを行い、チームの作戦と自分の役割について動きながら確認し合う。



評価セッション1



フレンドリーマッチを繰り返しながら、選択した作戦は機能しているかどうか、自分の役割は果たせているかどうか、などを話し合う。

テストマッチ

フレンドリーマッチや評価セッション1の活動を生かして、他グループのチームとゲームを行う。



評価セッション2



テストマッチを振り返り、選択した作戦がチームの特徴に合っていたか、一人一人の役割は適したものになっていたかなどを話し合う。

(3) 検証結果と考察

主体的・対話的な学びがどのように展開されたのか、一つのグループを紹介する。このグループは、運動が苦手でどちらかといえば体育学習に消極的な児童（D男、E子）と運動が得意で体育学習に積極的に参加する児童（F子、G男）の4名である。

このグループの学びの過程を、児童が記したワークシートの内容から追跡した。

運動が苦手な体育学習に消極的な2人の毎時間の授業の振り返りで記した内容は次のとおりである。

〔授業の中で嬉しかったこと〕

D男 第1時～第4時 無記入

第5時 チームから「ドンマイ」と言われた

第6時 失敗したとき「ドンマイ」と言われた

第7時 成功したとき「ナイスサーブ」と言われた

第8時 サーブが前より良くなったねと言われた

E子 第1時～第2時 特になし

第3時 ゲームで点が入ったこと

第4時 「ドンマイ」等声をかけてもらえた

第5時 「がんばれ」と言ってくれた

第6時 点がとれた

第7時 自分から進んで取り組むことができた

第8時 チームの人がいい雰囲気をつくってくれた

D男とE子ともに、単元が進む中で、体育学習に対する意識や態度が変容していることを読み取ることができる。

この2名と一緒に学習した他の2名（運動が得意で体育学習の積極的な児童）の単元終了後の感想は次のとおりである。

〔単元の感想〕

F子 わたしが特にがんばったことは「ドンマイ」などの声かけをすることです。最初、みんなの気持ちがバラバラでなかなかパスもつながらなかったし、声かけもできませんでした。でも、後からパスがつながるようになったし、お互いにアドバイスや声かけができるようになって、とても楽しくなりました。

G男 がんばったことは自分からチームのために声かけをしたことです。チームの人がミスをしたとき「ドンマイ」などと言ったり、肩をたたいて励ましたりしました。大会は最下位だったけど楽しかったし、このチームでよかったなと思いました。この経験を他の勉強にも生かしていきたいです。

F子とG男は、常に仲間を意識して学習を進めてきたこと、その結果、バラバラだった気持ちがまとまりパスもつながるようになったと実感している。

4名のワークシートの記述内容から、主体的・対話的な学びが充実していたことを読み取ることができる。

【表2】 抽出グループの形成的授業評価結果

第1時	第2時	第3時	第4時	第5時	第6時	第7時	第8時
2.63	2.80	2.83	2.77	2.91	2.94	2.83	3.00

表2は、このグループの形成的授業評価結果である。検証1で紹介した結果と同様に数値の変動は見られるが、単元が進むにつれ、数値が向上している（最後は一番良い結果）。このことから、このグループの主体的・対話的な学びも、試行錯誤を繰り返しながら充実していったと考えられる。

検証1と同様、このグループにおいても、児童同士のダイバーシティ（多様性）の下で、児童の「思いやる心」が働いたり高まったりしながら学習は進められており、児童の「思いやる心」が育まれたといえるのではないかな。

他のグループにおいても、主体的・対話的な学びの内容や質はグループによって異なるが、その学びが充実していたことが、後述している単元の形成的授業評価結果（図2参照）から読み取ることができ、検証1でも述べたように、それぞれのグループで、児童の「思いやる心」が育まれたといえるのではないかな。

以上のことから、検証2の学習は、主体的・対話的で深い学びが行われたと考える。

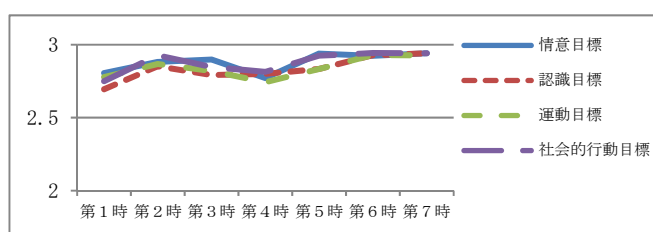
4 研究のまとめ

形成的授業評価は、「情意目標」「認識目標」「運動目標」「社会的行動目標」の4つの因子から構成されている。図1と図2は、検証1と検証2の検証授業の形成的授業評価の結果をその4つの因子で表したグラフである。グラフから分かるように、どちらの検証授業も、単元が進むにつれて評価が高まる結果となり、学習者にとって「満足度の高い」学習が展開されたことを示している。

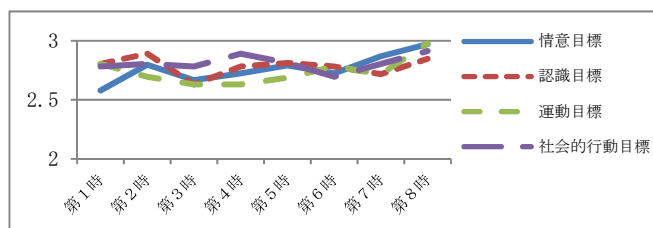
本研究は、小学校体育科における主体的・対話的な学びを通して、資質・能力「思いやる心」の育成を目指したものである。その資質・能力の育成を図

る前提として、体育科学習としての「主体的・対話的な学びはどうであったのか」ということが重要である。つまり、児童が、運動（本研究ではバスケットボールやソフトバレーボール）の特性に触れることができ、「できた」「分かった」「楽しい」と感じることであった学びであったのか、ということである。

本研究では、図1と図2に示したように、児童にとって評価の高い体育科学習を展開することができた。この結果が、資質・能力「思いやる心」の育成にも大きく影響したと考える。このことは、教科指導における「主体的・対話的で深い学び」を展開していく上で、大切な視点としてとらえていきたい。



【図1】 検証1の形成的授業評価結果



【図2】 検証2の形成的授業評価結果

《引用・参考文献》

- ・文部科学省(2008)「小学校学習指導要領解説体育編」
- ・文部科学省(2016)「審議のまとめ」
- 1) 高橋ほか(1994)「形成的授業評価票」

《参考》

今回使用した形成的授業評価の項目内容

(1) 心に残ることはあったか
(2) できるようになったか
(3) 「分かった」と思うことがあったか
(4) せいっぱい運動できたか
(5) 楽しかったか
(6) 自分から進んで学習できたか
(7) 目標や課題に向かって努力できたか
(8) 仲間と教えたり助けたりしたか
(9) 仲間と協力して学習できたか